研究報告

白蓮と伊藤伝右衛門

―新別府小手川家の仏壇―

矢島嗣久

明治四四年に伊藤伝右衛門は柳原燁子（白蓮）と再婚し、のち別府赤銅御殿で白蓮事件が起きる。別府市新別府の小手川家に所蔵されている仏壇は、かつて明治・大正期の実業家で筑紫の炭坑王といわれた伊藤伝右衛門が所有していたものである。

▲若き日の柳原白蓮

▲伊藤伝右衛門

一　白蓮の生い立ち

柳原白蓮は明治一八年（一八八五）十月一五日、東京市麻布で出生。本名は燁子。京都の華族・柳原前光伯爵の妾腹の子として生まれた。母は新見豊前守正興の娘おりょうである。生後まもなく、柳原家に入籍。叔母愛子（二位の局、前光の妹）の生んだ大正天皇とは従兄妹にあたる。明治二七年、九歳で北小路随光子爵の養女となり、同三三年、一六歳でその息子資武と結婚。翌年四月、息子功光を生む。しかし、夫は病弱で、愛のない生活に耐えられず、同三八年に離婚、ときに燁子二一歳であった。

明治四一年、東洋英和女学校に入学。同四三年（一九一〇）同校を卒業。在学中に佐々木信綱の竹柏園歌会（短歌）に入門する。同四四年三月、二七歳で筑豊の炭坑王・伊藤伝右衛門（ときに五〇歳）と再婚し、九州・福岡県飯塚に移る。

二　伊藤伝右衛門と別府赤銅御殿

伊藤伝右衛門は万延元年（一八

▲白蓮と伊藤伝右衛門の結婚記念写真

六〇）十一月二六日に生まれた。父は伊藤伝六、母はヨシ。伝右衛門は、明治・大正期の実業家で福岡県穂波郡幸袋村（現飯塚市）の生まれである。

父伝六は松本潜の創業を助け、松本の支援を受けて炭坑経営をする鉱主であり、伝右衛門は早くから家業に従った。明治三二年（一八九九）、伝六が死去すると松本の支配から抜け出して独歩の道を選び、採算が困難と見られた牟田炭坑の経営に成功し、同三九年、先発の鉱主が苦杯をなめた鉱区に中鶴炭坑を開抗し、筑豊屈指の大炭坑にした。

このころ、伝右衛門は牟田炭坑を初めとして中鶴、新手炭坑および伊藤商店を経営していた。大正五年（一九一六）、泉水炭坑を加えて経営を統合し、古川虎之助（古川鉱業、古川銀行などの社長・頭取）との共同出資で大正鉱業を設立、社長に就任した。第一次世界大戦のブームで巨利を得た。のち、昭和一二年（一九三七）伊藤合名会社を興す。鉱山業のほか無尽や銀行、セメント、鉄道などの事業にも進出して福岡県有数の実業家となった。また、明治三七年には衆議院議員（立憲政友会・当選二回）となり、政治家としても活躍した。

明治四四年に燁子（白蓮）と結婚した伝右衛門は、福岡および別府にも粋と贅を尽くした広大な別荘を建てて燁子を住まわせた。どちらも豪華な御殿様式の別荘で、屋根には総て銅板葺きを使用していたため、人々から「赤銅御殿」と呼ばれた。しかし、燁子の心は満たされなかった。当時、燁子は歌壇・竹柏会の同人で「白蓮」と号していた。この雅号は歌の師匠である佐々木信綱がつけたとも言われている。

「冷ややかな枯れ木のごとき偽りを
人の道としいうべきやなお」

「筑紫の女王」と歌われた白蓮のために炭坑王・伊藤伝右衛門が別府に建てた伊藤別荘、それを世間は「赤銅御殿」と呼んだ。

山田耕平（初代の別府市会議長、のち県議会議員、浜脇出身）は大正四年、県議に当選すると、別府発展の第一の仕事として、海岸から日名子旅館のところまでしかなかった流川通りを、まっすぐ山の手にのばして観海寺下から鶴見地獄、更に北へ鉄輪温泉地帯に達する現在の観光バス道路を県議会に提案、実現させた。

赤銅御殿が別府公園（別府球場、現在別府市立体育館を建設中）に隣接する急傾斜地（流川十三丁目、現青山町）に建てられたのはこの観光バス道路ができたためである。敷地五千坪（一万六千五百平方メートル）の買収あっせんも山田耕平が走りまわった。

▲赤銅御殿全景

別府の「赤銅御殿」。総檜作りの建物の工事は大正五年に取りかかり、翌六年の暮に完成、庭園はのち同八年の年末にやっと完成した。ケヤキ・ヒノキ・サクラなど高級材をふんだんに使った九棟の建物は、総て渡り廊下でつながれ、屋根がわらの下には、長野県諏訪産の鉄平石を薄板畳にして敷きつめた豪華なものであった。壁には金粉を吹き付け、雨樋や釣り灯ろうなど銅を随所に使った御殿造りであったため、後に「赤銅御殿」と呼ばれるようになった。ふすまの取っ手は、金を溶かした七宝焼きが使ってあった。家の間取りの内、主な部屋は庭園を前景にし、背景に必ず別府湾や仏崎、高崎山、立石山などの美しい風景が借景として利用された。

別府湾を形どった庭には、乙原からわざわざ清水も引き込んだ。主人の伝右衛門の部屋は二階に八畳と十畳、それを延べ十二畳の畳廊下が広々と取り囲んでいた。天

井は格天井、壁は金粉を吹き付けて黄金色に輝いていた。

白蓮の部屋は控え部屋四畳半と居間六畳のつつましい広さだが、一間床が二つ付いていて畳廊下から庭を前景に高崎山とその海が美しく見えた。床の間の下の横木に自然木を使い、細く波のように紅色の漆が塗り込んであった。ナゲシには、つや出しの太い竹を使用していた。

三　白蓮事件

大正八年（一九一九）、燁子（白蓮）が戯曲「指まん外道」を発表した。

別府在住の燁子（当時、三三歳）の前に、六つ年下の東大（東京帝国大学）法学部二年の学生・宮崎龍介（二七歳）が現れたのは大正九年一月三一日。以後、二人の間に文通が始まる。龍介は中国革命に協力した大陸浪人宮崎滔天の長男である。龍介は東大新人会の左翼系雑誌「解放」に掲載されている戯曲「指まん外道」を出版、および演劇上演打ち合わせのために来別した。

宮崎滔天は中国革命運動の援助者。名は寅蔵。明治三年（一八七〇）、熊本県に生まれた。兄の八郎、民蔵、弥蔵らは民権家・志士。徳富蘇峰の大江義塾に学ぶ。犬養毅の知遇を得て中国革命運動事情を調査した。同三〇年、来日中の孫文を知り、同三八年、黄興と孫文を引き合わせて中国同盟会結成に尽力する。辛亥革命後、中国で革命派を支援した。その後、滔天は浪曲師へ転身する。大正十一年（一九二二）に死去。享年五二歳。

宮崎龍介は国家社会主義運動家。明治二五年（一八九二）、宮崎寅蔵（滔天）の長男として熊本県に生まれた。東京帝国大学法学部在学中、赤松克麿らと新人会を結成する。大正九年（一九二〇）に卒業し、弁護士となる。翌十年、炭坑王伊藤伝右衛門と別れた歌人の白蓮と結婚する。昭和八年（一九三三）、龍介は無産運動から退き民族主義運動に走る。戦後、二九年に憲法擁護国民運動に参加した。

龍介と出会った白蓮の心に愛の灯火が燃え上がり、以後二人の間に文通が始まる。

大正十年一月下旬、九条武子夫人が別府市の赤銅御殿の白蓮を訪れている。武子は、西本願寺の門主大谷光尊の娘、昭和二三年（一九四八）十月に別府市鉄輪の別荘で死去した大谷光瑞氏の令妹にあたり、男爵九条良致氏（兄光瑞夫人の弟）の夫人である。夫は渡欧したまま永

く帰国しなかった。白蓮と武子の二人は竹柏園の同人。白蓮との別府の集いでは油屋熊八も顔を出している。

大谷光瑞の妹、九条武子は風をひいて敗血症を起こし、昭和三年（一九二八）二月に死去した。享年四二歳。

九条武子が別府で詠んだ歌には次のようなものがある。

「やはらかき湯気に身を置く　我もよし
　　こよひおぼろの　月影もよし」
「身にあまる願いはたてじ　虚泉に
　　心ゆくまま　うちひたりつつ」

伝右衛門は、「筑紫の女王」伊藤燁子（白蓮）から「私はあなたの妻として、最後の手紙を差し上げます」「私は金力をもって女性の人格的尊厳を無視する貴方に永久の訣別を告げます」に始まる絶縁状が新聞紙上に発表され、逆に傳右衛門は「燁子に与ふ」と題する手記を連載して反ばくした。大正十年十月二〇日、世にいう白蓮離婚事件は前代未聞の報道合戦の中で世間の耳目を集めた。

白蓮の絶縁状は燁子自身が書いた文ではなかったが、後年燁子は「でも、ああでもしなくては離婚を認めてくれる伊藤じゃなかった」と語っている。

大正十年十月二〇日、燁子が家出を決行。ときに燁子三六歳、龍介二九歳。

同月二二日、大阪朝日新聞は燁子の家出を報じ、同夕刊に「燁子の絶縁状」を掲載した。

同二四日、大阪毎日新聞、伝右衛門が「絶縁状を読みて燁子に与ふ」手紙を四回に及ぶ連載で掲載する。これは夫・伝右衛門が知り合いの新聞記者に胸の内を語った形式で発表された。しかし、大阪毎日新聞に燁子への反論を展開した伝右衛門は、掲載を中途で打ち切るよう要請した。この文も、新聞記者の脚色が入っていると言われている。そして伝右衛門は一族を集めて「末代まで一言も弁解は無用」と宣言した。

・十一月、伊藤・柳原両家の合同親族会議が開かれ、善後策を協議する。
・十一月二六日、伊藤家の福岡の新居「赤銅御殿」が落成する。
・大正十一年三月、燁子の異母兄柳原義光が貴族院議員を引責辞職する。

・同年、燁子が柳原家で監禁の身となる。五月には龍介との子、長男香織を出産する。
・大正十二年九月、関東大震災が発生。
燁子が龍介のもとに帰され、香織とともに宮崎家の人となる。以後、柳原燁子の筆名で文芸活動を始め、病身の龍介に代わり一家を支える。
・大正十五年、燁子、龍介との間に長女蕗苳子が誕生する。
・昭和二〇年八月十一日、学徒出陣中の長男香織が鹿屋基地にて戦死。
昭和二一年五月、燁子がNHKに出演。これを機に、戦後の平和運動に参加する。「悲母の会」を結成、のちに世界連邦婦人部の中心となる。
伊藤伝右衛門は、衆議院議員を二期務め、地元の若者の教育に現在に換算すると数億円という金額を寄付して、昭和二二年十二月一五日に死去する。享年八七歳。
宮崎龍介はその後、無産運動に参加。戦後は平和運動に専念した。白蓮とともに中国に長期の親善旅行もしたこともある。

四　戦後の赤銅御殿

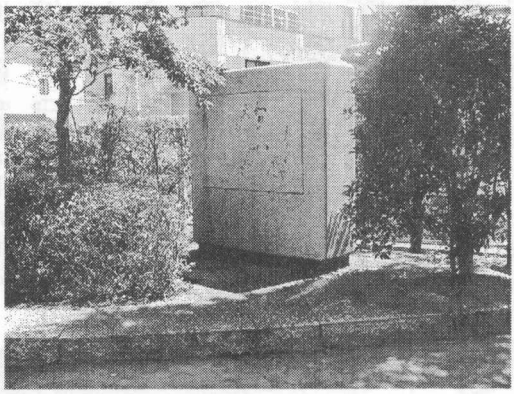
赤銅御殿は太平洋戦争が始まった昭和十六年九月、海軍の水交社となった。昭和十八年四月、ソロモン島上空で戦死した元帥山本五十六も、白蓮の部屋で読書をしていたという。戦後（昭和二〇年）は米軍に接収され、将校宿舎やクラブに使われた。接収解除後、昭和二九年に新たに七室の別館を設け、「ホテル赤銅御殿」となった。のち、転々と人手を渡る。
昭和五四年十二月、別府の赤銅御殿は高級住宅地造成のため解体された。解体時、屋根からは三千枚の鉄平石（輝石安山岩）が出ている。御殿のふすま・欄間・鬼がわら・白蓮の歌碑などは別府市へ寄贈された。現在、別府の赤銅御殿跡地は住宅分譲地となって住宅が建ち並んでいる。その一隅に小さな公園があり、公園内で西南側の隅に石造り（岡山の万成竜王石、高さ一・八メートル、横一・九メートル、厚さ五三センチ）の「白蓮の歌碑」が建てられている。その歌碑には

和田津海の沖に火もゆる火の国に
我あり誰そや思われ人は　　白蓮

と読むことができる。その歌碑の正面左手には、白蓮と宮崎竜介の事柄が記され、最後に「ホテル赤銅御殿の庭内にこの歌碑を建立する　昭和二十九年九月二十三日　建立」と記されている。

歌碑の右側には、寄贈者の住建株式会社と土地株式会社の名が、歌碑の左側には「首藤克人　以下八名」の名が彫(ほ)られている。この石造りの歌碑は、もとホテル赤銅御殿の庭に建てられていたものである。

事件から三四年後の昭和二九年九月二三日、白蓮（六九歳）は赤銅御殿にできた彼女の歌碑（石碑）の除幕式の日、久し振りに別府の御殿を訪ねた。歌碑には先掲の歌



▲白蓮の歌碑

和田津海の沖に火もゆる火の国に
　われあり誰ぞや思はれ人は　　白蓮

が記されている。また、そのとき詠んだ歌に、次の二首がある。

「再びは来じと思いし窓により
　庭の木立に秋の声きく」

「憂かりける月日の流れあやしかも
　思出となればなど美しき」

翌三〇年六月二四日には、再び白蓮（燁子）が別府の赤銅御殿を訪れた。今回は夫の宮崎龍介（六二歳）も一緒だった。

・昭和三六年一月、燁子が緑内障のため両眼を失明する。翌三七年（一九六七）二月二二日、宮崎燁子が死去する。享年八一歳。

・五年後の昭和四二年一月二三日、宮崎龍介が死去する。享年七八歳。

別府市菓子協同組合が共同研究し開発した和菓子「幻(まぼろし)

▲小手川吉夫

の華（はな）白蓮」は、別府とえにし深き女流歌人「柳原白蓮」とその歌集「幻の華」から命名された別府を代表する銘菓で、現在市内で発売されている。

福岡県飯塚市幸袋にある「伊藤伝右衛門の旧邸の保存を願う会」が平成十四年七月に開かれた。この旧邸は明治時代に建てられ、増築を重ねた入屋造（いりもやづく）りである。歌人柳原白蓮と暮らした家としても知られている。前年の十三年七月、所有者が飯塚市に売却を打診した。買収できない場合は解体することを伝え、翌十四年末までに結論を出すよう要望、売却価格は数億円という。

五　伊藤家の仏壇と新別府小手川家

小手川吉夫氏（新別府町）は明治三二年（一八九九）十一月二九日、大分県津久見市千怒（ちぬ）に生まれた。夫人の寿美子さんは大分県宇佐郡院内町の出身である。吉夫は鹿児島市泉町において、林業・金山・銅山を経営していた。

新別府（これまで森山といった）は大正三年、温泉付き別荘分譲地として造成された。戦後、県下で最初の地区計画モデル地区となった。吉夫は昭和三一年、その一区を購入して自宅とした。

伊藤伝右衛門が福岡県飯塚市の自宅に所有していた仏壇は、伝右衛門が明治四二年（一九〇九）に作らせたものである。

▲小手川家の仏壇

昭和三九年、伊藤家から仏壇を手放したいという話を小手川家に知人が持ってきた。同氏が熱心な真宗の信者であったため、同年の十二月頃、福岡県飯塚市の伊藤家にお参りさせていただき、仏壇を譲り受けた。仏壇の大きさはおよそ畳四帖（じょう）分ほどあった。

翌四〇年三月初旬に仏壇を買い受け、三月末から数回に分けて別府へ運搬した。

四月十三日には京都の仏具師を別府へ招き、同年の十一月頃、四畳の広さの仏間を完成させた。最初は仏壇だけを買い受けたが、数日後、飯塚の伊藤家から「本尊もお守りして欲しい」との申し出があり、それをお受けして仏壇に安置させてもらった。本尊は阿弥陀仏である。

大分市在住の建築家、村松幸彦氏のインターネットのホームページによれば、「折上げ格天井、書院造りの仏間の奥には四畳の仏間を設け、ミニ寺院ともいうべき形式を整えている。金色に輝く鳳凰の舞う欄間彫刻、観音開きの扉を開くと三基の宮殿に阿弥陀仏を中心に法然、親鸞上人の絵像を祀る。見上げると、折上げ格天井の格間には彩色を施した紋様が描かれ、その配色の妙は華麗の中にも気品をそなえている。仏具一式も緻密な細工を施し、まさに仏間の王者ともいえるべき風格をそなえている。（平成六年十一月）」と紹介されている。「折上げ」とは天井の中央部を高くすること、「格天井」とは角材を格子状に組んで、上に板を張った天井のことをいう。

新別府、小手川家の仏間が完成した直後の昭和四〇年十二月三日、浄土真宗本願寺派（西本願寺）の第二三代勝如上人大谷光照門主が別府市観光会館（現別府トキハの場所）での行事を済まされ、新別府の小手川家に宿泊された。

光照門主は、翌昭和四一年四月四日、五日に別府市北浜の本願寺別府別院で御法要があった際、新別府の小手川家に二泊された。

光照門主の父、大谷光明（明治一八年～昭和三六年）は浄土真宗・西本願寺二一世門主、明女上人の三男に生まれた。光明の長兄には大谷探検隊で有名な、二二世門主・大谷光瑞鏡如上人（明治九年～昭和二三年）がおられる（大谷光瑞鏡如上人については、『別府史談』第七号に紹介されている）。光照門主は昭和二年十月二一日に浄土真宗本願寺派、第二三代御門主に就任された。従って、光照門主は大谷光瑞上人の甥にあたる。

別府市鉄輪に大谷光瑞鏡如上人が遷化（死去）された跡が現在「大谷公園」となっている。この大谷公園内に「光瑞上人遷化之処」と書かれた大きな石碑（昭和二五年四月、立石者・高岸源太郎）が建てられた。石碑の正面には大谷光照門主のご染筆による「光寿」と彫られた

香炉台が据えられている。

新別府の小手川吉夫氏は昭和六三年八月二二日に死去された。享年八八歳。現在、長男の弘昇（こうしょう）氏が林業関係の事業を引き継いでおられる。

（完）

取材や写真等ご協力頂いた方々は、左記のとおり。

別府市新別府の小手川寿美子様
同　新別府の古屋謙一氏
同　大畑の川田　康氏
同　朝見の藤田洋三氏
同　山の手の藤野慶子様
大分市上野丘の村松義彦氏
同　三川の首藤静香様

〔引用参考資料〕

『別府今昔』是永　勉著　昭和四一年五月
大分合同新聞社発行
「浄土真宗本願寺派ホームページ」　平成一四年七月
『福岡県百科事典　上・下巻』　昭和五七年
西日本新聞社
『現代日本　朝日人物事典』　一九九〇年一二月
朝日新聞社
『新潮日本人名辞典』　一九九一年四月　新潮社
『大分県歴史人物事典』　平成八年　大分合同新聞社
『恋の華・白蓮事件』　一九八二年一一月
永畑道子著　新評論
『別府市誌』　昭和六〇年三月　別府市役所
「村松幸彦ホームページ、別府ふるさとガイド」
平成　六年十一月
『白蓮れんれん』一九九四年一〇月
林真理子著　中央公論社
『別府歴史散歩　泉都有情』
平成五年七月　永尾和夫著　西日本新聞社
「別府、見・遊・自・編」二〇〇三年カレンダー
『別府近代建築史、地霊』一九九三年十二月
編集者　藤田洋三